

# 科学的研究方法に潜む思考傾向

——デカルトの「方法序説」に遡った仮説的試論——

高岡義幸\*

## 要旨 (Abstract)

元来、客観的な実証を行わなければならない科学的方法であるが、そこに各種の価値観が介入することは避けられない。時代時代の、そして国、地域、人などの宗教や思考形式の介入である。そのため、他者の学説、特に外国の学説や諸制度を解釈する際には表層的なものの理解に止まっていたり主張の有効性と限界が理解できなくなる。特に偏見や尊崇の念が加わるといっそう客観性が阻害されることが懸念される。

本研究では、まず近代科学の形成に大きな貢献をしたと言われているデカルトの思想に遡り、17世紀に誕生した近代科学の基礎に存在するであろう思考形式や価値観を探ろうとした。そこにはギリシャ思想、特にプラトンとアリストテレスの思想、並びにキリスト教の影響が強く働いていることが確認できる。ただ本研究はまだ近代科学の誕生時における思考傾向を捉えた仮説的試論である。その後の科学の発展と今日の科学的方法の基礎に潜む思考傾向の探求は今後の課題とする。

## 目次

はじめに

### 1. 問題提起

- 1.1 立論の文明史的要因を理解することの重要性
- 1.2 根拠なき尊崇の危険性

### 2. 科学的方法の基本的思考形式

### 3. 16・17世紀までのヨーロッパの自然観と学問特性

- 3.1 思考形式の骨格
- 3.2 古代ギリシャの思考形式
- 3.3 古代ギリシャ思想とキリスト教の結合
- 3.4 学問的営みと宗教

### 4. 科学的方法から見たデカルトの思想

- 4.1 デカルトの主張の枠組み
- 4.2 出発点としてのコギトール
- 4.3 精神と身体を区分する二元論の意義
- 4.4 新たな自然観と自然の解明

### 5. 要素還元思考と理論構築の精度

- 5.1 部分の総合による全体の説明
- 5.2 要素の選抜と捨象

### 6. 本研究の総括

おわりに

## はじめに

ここ10年ばかりコーポレート・ガバナンスの研究を行ってきた。その過程で気付いたことであるが、この分野では欧米、特に米国の諸学説と制度が、あたかも絶対的に優れたものであるごとくほぼ無批判に模倣されていることを確認した。しかも学説や制度の基礎にある価値観や文明史的背景はほとんど考慮されることはなく、表層の形式のみが輸入されている。その結果、日本国内では制度がほとんど有効性を発揮できず、不適合状態に陥っていると言っても過言ではなからう<sup>1)</sup>。このような事態は一刻も早く改善・解消すべきだと考える。

外国の学説や経営方策の真意を理解するのは難しい。その理由の一つは翻訳に伴う一般的な限界である。一語一語をどの日本語に置き換えればよいのか。いくら求めても100%合致する語はほとんどないであろう。そのためしよせんは近似語で置き換えるしかないのであるが、も

\* 広島経済大学経済学部教授

どかしさは禁じ得ない。もう一つの理由は学説構築の論理やその文明史的背景がなかなか捉えられないからであろう。浅薄な解釈で分かったような気になっている危険性がある。諸外国の学説をより深く理解するにはどうすればよいのか。

本研究では今日の主たる学問方法である科学の基底層にある思考傾向に着目している。ここで言う思考傾向とは存在に関する本質観というレベルの思考であり、存在一切をどう理解し説明するかという思考である。そこで本稿では近代哲学の祖と言われているデカルトの「方法序説」を重点的に取り上げ、ここから近代科学誕生時の基礎的思考を探ってみた。したがって、本研究ではデカルトの哲学自体を哲学論として論じようとするものではない。大きな名前を恐れることなく、すなわち崇め奉らずに、しかし謙虚に解釈を試みたい。現代の欧米の経営学説や経営方策をより正確により深く理解するための鍵の一つでも捉えることができれば幸いである。

## 1. 問題提起

### 1.1 立論の文明史的要因を理解することの重要性

一般に歴史上の諸物は過去と不連続に生み出されるものではない。その時代、その地域における文明史的諸要因と密接に結びついているのが通例であろう。このことは主観性の排除と実証性が強調される科学的方法においても言えるのではなからうか。科学的方法の形成においてはヨーロッパの思考形式がベースとなっているはずだ。そしてこのヨーロッパの思考形式にはギリシャの思考形式が継承されていることが知られている。またその他に軽視できないのがキリスト教の影響である。その影響は欧米において今日まで根強く生き続けているようだ。

研究に対するキリスト教の影響は米国にも明

確に見られる。宗教的理由で科学的成果が否定される事態も見られる<sup>2)</sup>。たとえばダーウィンの進化論が否定される事例はよく知られている。しかし欧米諸国に比べて、日常生活におけるキリスト教の影響が相対的に少ない日本においては、この問題はともすれば見過ごされがちになる危険性がある<sup>3)</sup>。

日本における経営学分野の研究や実践では、従来、欧米の研究成果や実務制度が数多く輸入されてきたし、現在もその動きは継続されている。そのため欧米の学問方法の性格を深層まで掘り下げてより正確に理解しておくことは特に重要であると考えられる。

### 1.2 根拠なき尊崇の危険性

日本の経営学は、第二次大戦以前は主としてドイツから輸入され、戦後は主として米国から輸入されるものを核として発展してきた。第二次大戦直後から高度成長期を経て今日まで米国の学説と経営方策をモデルとして導入する動向はなお根強く継続していると考えられる。この傾向は前に述べたとおり、コーポレート・ガバナンスの分野においても明確に確認できる。

一般に、他者の主張や見解を冷静に聞き、可能な限り公正に評価して学ぶことは科学的研究方法の論理に照らして自他双方にとって極めて有益である。特に研究に携わる者にとってはその重要性はより高いと言えよう。ただ近年、筆者は日本の経営学研究に対してある種の不安を覚えることがしばしばある。それは欧米、特に米国の学説や経営方策に対する評価がもはや通常の敬意の域を超えて尊崇とも言うべき域に達していると思われる事態にしばしば遭遇するからだ。米国の事例がグローバルスタンダードの名の下に紹介され、全てはこれに収斂すべきであるかのごとく賞賛されることもある。しかも尊崇が事の内容面での根拠を示さずに行われるからこの事態は軽視できない。おそらくこのよ

うなことを行う当人にとっては「米国発だから」が当然の根拠なのであろう。

尊崇は偏見と同様に他者の理解を歪めてしまう。偏見は不当に低い評価をもたらす。尊崇は不当に高い評価をもたらす。学説や行動の内容ではなく、どこで立論されたかによって評価が左右されるのは人的支配が行われていた時代の思考形式に似ている<sup>4)</sup>。

このような行動は大なり小なり思考停止を伴うものである。尊崇と思考停止は学説と諸方策の理解と評価を歪め、結果的に少なからぬ損害をもたらす危険性をはらんでいる。

## 2. 科学的方法の基本的思考形式

「方法序説」に取り組む前に、念のために今日、科学の基本的思考形式と言われていることを確認しておこう。それは通例下記の4点で示される<sup>5)</sup>。本節ではまずこれらの意味するところを確認し、次節以降でこれらの由来と、その根底にある発想・思想を探ってみたい。

- a) 要素還元法, b) 機械論的思考, c) 因果律思考, d) 帰納的方法

「要素還元法」とは研究対象を捉えやすくするために全体をいくつかの部分・要素に分けることを言う。一般に部分は全体より単純になるため捉えやすくなるからである。もちろんここに言う「全体に分ける」とは単なる量的分割ではない。既知の知識を用いて説明できる可能性を探る分割である。

要素還元には、後に部分を総合することが予定されている。したがってここには全体は部分の総合によって説明できるとする認識がある。分けられた部分・要素の振る舞いを律する法則を捉えれば、それらの結合によって全体を説明できるという考えである<sup>6)</sup>。

「機械論的思考」とは自然現象に目的も生命も認めず、宇宙全体を精密な機械とみなし、物質的・統一的な法則が世界を支配しているとい

う考え方である。自然が数量的な関係として説明できると主張する<sup>7)</sup>。

「因果律思考」は現象の連なりを原因・結果的に見て順序づけようとする発想である。因果律思考をすることによって法則が明らかになると、これを応用して制度や自然を改変することが可能になる。科学が政策面で有効性を発揮するゆえんである。

「帰納的方法」は個々の観察や実験の結果得られる基礎データの集積から普遍的な理論や法則を推理することである。学問の発達にとってこの方法が重要であるのは、真理の探究を神に依存していた方法から転換して、人間による観察と実験を中心とする経験科学の方法論を確立することに寄与したからである。

## 3. 16・17世紀までのヨーロッパの自然観と学問特性<sup>8)</sup>

### 3.1 思考形式の骨格

ヨーロッパ社会における学問の基礎にある思想の特徴を明らかにするためには二つの点に着目することが不可欠であろう。一つは古代ギリシャ思想の継承であり、いま一つはキリスト教の影響である。ここで言う古代ギリシャ思想の形成者はソクラテス、プラトン、アリストテレスである。これら三者の内、後の二者の思想がキリスト教の教義と融合されながら近代科学の誕生時まで連綿と受け継がれていた。

### 3.2 古代ギリシャの思考形式：自然観と実体論思考

古代ギリシャには自然学 (Physica) と称される自然探求の試みがあった。これは神話による説明ではなく、論理 (ロゴス) によって自然を認識しようとするもので、存在の最も根本にあるものを探る試みであった。そして何か根源的なものを措定し、万物はそれによって形成され規定されているとする認識があった。この根

源的なものは substance という語で示される概念で、「下にあるもの」、「下で支えるもの」という意味であり、これは日本においては通常「基体」あるいは「実体」と訳される。このような存在観は今日「実体論」と称されている。

実体論の原型となった古代ギリシャの実体論的思考には下記の三つのタイプがある。

- ①ソクラテス以前のもの
- ②プラトンの主張
- ③アリストテレスの主張

これらの内で①と②の間には本質的な違いがある。ソクラテス以前には自然は「自ずから生成するもの」と考えられていた。そのため存在の根源的なものはまだ自然物で示されている。例えばタレス (BC624-546) は水を、エンペドクレス (BC490-430) は空気・水・火・土を万物の構成要素とした。またデモクリトス (BC460-370) は物質を究極的なものにまで分割することによって、これ以上分割できない要素をアトマスとし、物質をこれによって構成されるものとして説明しようとした。この段階では人間も自然の一つとされるため、自然のロゴスに従って生きることが最高の倫理とされている。

しかしプラトン以降は実体論的存在観に大きな転換が生ずる。その一つは、自然が何かによって「つくられて存在するもの」と考えられるようになったことである。いま一つは、存在の根源的なものが自然物ではなく超自然的なものとなるようになったことである。それ自身は自然の内には存在するとはみなされないものが指定され、自然はそれに規定されて存在していると考えられるようになったのである。ちなみに木田元によれば、このような発想に基づく自然観こそがヨーロッパ哲学の基本的特徴であり、日本にはこのような自然観はない。

アリストテレスはプラトンの弟子であるため、基本的には師の考え方を継承しているが、プラ

トンの主張をかなり修正し、いわば①と②の折衷論とも言うべき主張を行っている。両者の主張の要点は下表のようになる。なお存在の根源的なものを、以後「超自然的原理」と表記する。

ヨーロッパにおいては主としてこの両者がキ

	プラトン	アリストテレス
自然観	つくられてあるもの 機械論的自然観 無機的で生命はない	つくられてあるもの 有機的自然観 目的と生命がある
超自然的原理の名称	イデア	純粹形相
超自然的原理の定義	事物の理想的な形 現実世界はイデアの模 像	目的論的運動の究極 の目的 可能性を全て現実化 した完成形

リスト教と結びつきながら継承され、存在観、自然観をリードして今日に至っているようだ。

### 3.3 古代ギリシャ思想とキリスト教の結合

これら二つの結合を捉える上で重要な役割を果たした人物を二名挙げるができる。アウグスティヌス (354-430) とトマス・アクィナス (1225/26-1274) である。これら両者の活動が古代ギリシャ思想とキリスト教の結合に転換をもたらしている。

アウグスティヌスが登場したのは西ローマ帝国が滅亡する (477年) 少し前である。彼はプラトン哲学を学んで「つくられてある」存在論を継承し、新たな超自然的原理となる「キリスト教的な人格神」を提示している。彼はこの原理を用いて神の世界創造論を基礎づけ、キリスト教の教義体系を形成している。この教義体系はローマ・カトリック教会の正当教義とされ (529年)、およそ13世紀まで影響力を維持していたようだ。この教義では原則として国家と宗教は分離されていたが、カトリック教会による世俗政治への介入がしだいに強くなったため、

この矛盾を解消するために新たなキリスト教の教義が必要とされた。ここで登場するのがトマス・アクィナスである。

トマス・アクィナスによる新たな教義に見られる思想はスコラ哲学とも称されるが、そこではアリストテレス哲学を取り入れてプラトン一辺倒路線の修正が図られている。その特徴は自然観の転換に見られる。アリストテレスが主張した有機的自然観の採用である。ここでトマス・アクィナスが提示した新たな超自然的原理が「実体形相」である。これは一種の生命的原理で、われわれが感じ取る感覚的諸性質を実現する基体とされている。いま一つの特徴はカトリック教会による世俗政治への介入を許容している点である。これによって教会と国家の関係に見られた矛盾は解消されるため教会にとっては都合の良い教義であった。しかしこれが後に教会や聖職者の腐敗墮落をもたらし、宗教改革運動の原因となったことは周知のとおりである。

この腐敗墮落の拡大を受けて、早くも14世紀には信仰を浄化する動きが生じ始めていたようだ。その後、かつてのプラトン・アウグスティヌス主義を復興する運動が起こるのであるが、まだ有機的自然観に基づくアリストテレス・トマス主義が支配的な力を有していた時期にも、例外的ではあれ、自然を量的・機械論的に見る動きも生じている。コペルニクス（1473 - 1543）、ケプラー（1571 - 1630）、ガリレイ（1564 - 1642）などの活動である。彼らによる天体観測や実験の動機は今日の物理学の目指すものとは違って、信仰に基づいて神による創造のデザインを確認することにあつたことはよく知られている。しかし結果的には彼らの活動やプラトン主義の復興による数学的・機械論的自然観の浸透がデカルトにも影響を与え、彼の二元論の下敷きになったことは十分考えられる。

上述のとおり、超自然的原理は下記のように

展開されている。なお、後述するとおり、これらに次いでデカルトの「精神・理性」が加わる。

イデア（プラトン）

純粹形相（アリストテレス）

キリスト教的人格神（アウグスティヌス）

実体形相（トマス・アクィナス）

### 3.4 学問的営みと宗教

科学革命以前、学問は宗教や哲学と不可分に結びついていた<sup>9)</sup>。16世紀までの自然研究は神学に従属し続けていたため、自然現象を説明する際にもそれに神の属性が付与されていた。当時の学問的革新は神学的に表現された<sup>10)</sup>。そもそも古代世界や中世においては、現代科学のようなものは決して目標とされていなかったのである<sup>11)</sup>。

17世紀に至っても自然哲学者（今日の物理学者に相当する）にとって「研究」とは神によって制御されている宇宙の秩序を探求することであり、彼らが言う「法則」とは神の立法行為から生まれたものを意味した。コペルニクスやガリレイの研究動機もそうであったことは前に指摘した。そしてそのような認識は17世紀に至ってもなお継承されていた。たとえばデカルトも「神が自然の中に仕組んだ法則を」探求していると言い、ニュートンでさえ「全知全能の神の訓戒と統制」を探求していると言ったという<sup>12)</sup>。近代科学誕生のためにはスコラ哲学を打破し、宗教的観念を切り離すことを必要としたが、神学の影響は一挙に解消されたわけではなかった。

## 4. 科学的方法から見たデカルトの思想

### 4.1 デカルトの主張の枠組み

近代科学の誕生に貢献した哲学的アプローチには二つのより具体的なアプローチがあると言われている。経験論と合理論である。前者は真理探究の基礎を人間による経験に求めるもの

で<sup>13)</sup>、後者は真理探究の基礎を人間の精神、言い換えれば理性、思惟力に求めるものである。R. デカルト (1596-1650) はその代表者とも言われている。ここでは彼の著作「方法序説」<sup>14)</sup>に遡り、その内容を紐解くことによって彼の思想と科学的方法との関係を確認してみたい。

最初に彼の主張の枠組みを確認しておこう。下記の四つのステップに整理することができるようだ<sup>15)</sup>。

- ①彼の哲学全体の出発点となる原理は思惟（コギト）である。
- ②この思惟から出発して精神と身体（物体）を区別する二元論を導く。
- ③ここからさらに物体に着目して機械論的自然学に至る。
- ④これらを踏まえて全ての学問へと進む。

#### 4.2 出発点としてのコギト

さて、かのあまりにも有名な言葉「われ考える、ゆえにわれあり」の意義を考察してみよう。これはなぜ唱えられたのであろうか。「われ考える」の原語は周知のとおり「cogito」である。そしてこの語はデカルトの哲学全体の出発点であるとも言われている<sup>16)</sup>。

この主張は、13世紀以来それまで長くヨーロッパを支配してきたスコラ的思考から脱却するために自分自身の思考力、考察力への自信を表明したものであろう。おそらくデカルトは神を公理として全ての事象を演繹的に説明する方法に限界ともどかしさを覚えていたのではなからうか。しかし当時の社会状況からして、あからさまに教会に反旗を翻すことはあまりにも危険が大きすぎる。またそこまでする自信もないし、まだまだ神に対する信仰も恐怖も強かったものと推測される。そこで後述するとおり、主張の根拠は神に求めつつ、己の思惟力への自信を明らかにしたものと考えられる。おそらく当

時の状況下では精一杯の主張であったのであろう。

#### 4.3 精神と身体を区分する二元論の意義

##### 4.3.1 精神（新たな実体）の抽出

前節で示したような大胆な主張をするためには自己を含む人間の思惟が正しいことを示す根拠が必要である。その根拠を示すための論法が二元論だと考えられる。それは二つのポイントで解釈すると分かりやすい。まず第一は人間における「精神」の抽出である。彼は自分自身から精神を抽出し、これと身体とを区分して「私を私たらしめているものは精神で、これは身体とは全く別個のものだ。精神は身体がなくても存在する」と主張している<sup>17)</sup>。彼はこの論理を自分を含む人間全体に適用して、人間を人間たらしめている実体は精神だとしている<sup>18)</sup>。これは新たな実体すなわち存在の根拠の提示だと言えよう。思惟（コギト）とはこの精神の働きである。

ここで思惟（コギト）についてももう少し詳しく確認しておこう。デカルトの言う思惟とは、別の言葉で言えば意識であり、また良識（bon sens）とも理性（raison）とも言い換えられている<sup>19)</sup>。それは訳者の言葉を借りて分かりやすく言えば、「人間が生まれついて具有する能力」、「よく判断する能力」、「全て弁別する能力」である<sup>20)</sup>。この思惟あるいは理性こそが彼の思想を理解するキーワードになるのであるが、それは「すべて思惟するものは有る」という主張が彼の言う真理の大前提になっているからである。言い換えれば、思惟する自己（私）が一切の存在の根拠だと主張されているからである<sup>21)</sup>。前節で取り上げた宣言「われ考える、ゆえにわれあり」はこのことを象徴的に言い表したものと見えよう。

##### 4.3.2 理性と神

二元論の第二のポイントは精神も物体も共に

神に由来するとされている点であろう。そして特に精神が神から注入されたものであるがゆえにそれは真実ならざるを得ないことが強調されている<sup>22)</sup>。デカルトは自己の理性、思惟による判断は正しいと主張してはみたものの、その根拠を示さなければならない。そして結局、彼は自己の理性、思惟が真実であるのはそれが完全性を備えた神に由来するからだ、とせざるを得なかったのであろう。

このように神と人間との関係という面から見れば、彼の主張は一見相矛盾する内容を含んでいる。真理の探究を全面的に神に依存するスコラ的な従来の学問に距離を置いて、人間の理性、思惟力、思考力による真理探究の可能性を主張したのであろうが、その正当性の根拠はまだ神に求めざるを得なかったからである。しかしこのジレンマこそが、学問の長い歴史的発達過程で、宗教的アプローチと科学的アプローチを橋渡しした哲学的アプローチの歴史的役割と宿命を示すものであったと言えるのではなからうか。

さて、デカルトの二元論はそもそも人間の精神、理性、思惟する能力を強調するための論理であったと考えられるが、結果的には精神から分離された物の認識、すなわち自然観、宇宙観の転換にもつながる論理になっていると言えよう。次項では機械論的自然観について考察してみよう。

#### 4.4 新たな自然観と自然の解明

##### 4.4.1 機械論的思考

二元論によって精神を分離されたもう一方の実体は物体である。そしてデカルトは物体の本性は色や重さなどの感覚的性質にあるのではなく幾何学的延長にあるという。ここに言う「延長」とは抽象的で理解しにくい用語であるが、彼は次のように言っている。「物体の本性は堅さとか重さとか、色やその他の感覚的性質に依存するのではなく、長さ、広さ、深さにおいて

延長するものである」。そして「物体は延長し運動する」。これらの表現から推測すると、要するに物体は三次元的に拡大し運動するところにその本質があると解釈されているものと言えよう。そして延長と運動が自然学の本来の対象となる<sup>23)</sup>。

##### 4.4.2 因果律思考

機械論的自然観に立脚すれば物の事象は全て量的に把握される。量的に把握できれば測定が可能になり、これを純化すれば数学的把握が可能になる。数学的な把握ができれば事象を、目的ではなく客観的因果関係で説明できる。したがって因果律思考は機械論的自然観と一対のものとして科学的方法を支える基本的な思考形式となる。

##### 4.4.3 要素還元思考

デカルトは物体の本性を捉えるに当たり、三次元に延長する物体の特性は可分性であると述べている<sup>24)</sup>。この思考形式はデカルトの「学問の方法4箇条」の中の第二条と第三条に述べられていて重要な内容となっている。両条を訳者の解説をも含めて要約すれば次のようになる<sup>25)</sup>。

- ①より良き解決のためには研究対象となる問題を可能な限り細かな小部分に分割する。問題は複合的であるためこれを単純な問題に還元する必要がある。分割によって区分された各部分はより単純なものになるからである。
- ②次に、より良き解決のためには、分割された各問題を思惟する順序が大切である。分割された各問題には直線的な系列、依存関係があるからである。決して偶然に基づいて行ってはならない。
- ③具体的には、最も単純で容易なものから思惟を始め、その後は系列に従って思惟を重ねて、最後に全てのものの認識に到達する。これが要素還元に関するデカルトの主張内容である。

ちなみに、第一条は明証の規則である。明証的に真であると認めることなしには、いかなる事も真であるとして受け取らぬことである。ここに言う「明証的」とは直証的、直接的と言うことで、要するに「直感」と言い換えることができる。したがって明証は感性的知覚によるのではなく、純粹思惟の直感によるものでなければならぬ。彼によれば、純粹な直感の内には誤謬はない<sup>26)</sup>。

第四条は「枚举の規則」である。これは分割された各要素に関する思惟が全て漏れなく行われたことの、いわば全般的検査である。ここには思惟の順序と網羅性を重視するデカルトの完全性指向が窺われる。またこれは全ての要素を通覧的に見るという点で「帰納的方法」にも通ずる内容だとも考えられる。

ここに示した「学問の方法4箇条」には科学の基本手順の原型とも言うべきものが示されているとも言えよう。

## 5. 要素還元思考と理論構築の精度

### 5.1 部分の総合による全体の説明

前に指摘したとおり西洋には思考の原型として「実体論的な思考」が存在すると言われている。実体とは知覚されうる個々の存在物の根底にあって、これを制約していると考えられる物である<sup>27)</sup>。ただ、近代科学誕生時の実体概念はまだ超自然的原理によるもので、この点で現代科学の要素還元論とは異なる。

さて、要素還元思考に基づいて考察対象を多くの要素に分解すれば、要素間の因果関係を実証した後に諸要素を総合して全体を再構成しなければならない。その際に、部分と全体の関係をどう捉えるかという問題に直面する。その捉え方には大きく分けて二つのタイプがある。有機体論と機械論である。前者では、全体は部分の総和ではないとの認識の下に、全体の目的や効果が先にあって、それが部分の存在を意義づ

けるとする。他方後者では、全体は部分の総和であるとの認識の下に、部分が全体を規定するとする<sup>28)</sup>。デカルトが唱えた機械論的自然観に立脚すれば、自然は量的概念として認識されるので、いったん分解した各部分を総合して全体を説明することは合理的な方法だとされる。

しかしこの方法には下記の根本的問題が残されている。

- ①分解された部分と、結合された後の部分は同じか。(これは「分解される前の部分と、分解された後の部分は同じか」と言い替えてもよい)
- ②部分同士の関係と、その関係から生ずる効果(部分単独では生じない効果)が無視されるのではないのか。全体には部分の性質の単純な総和に留まらない性質が現われることがある。

この問題は医学分野でもしばしば議論の対象となる。全体としての人体とこれを構成する各臓器との関係である。人体は有機体で、各臓器は相互に密接に関係し合っている。しかし還元主義に立脚すれば、各臓器間の相互依存関係は軽視され、人体までも物としての部品の集積として認識される傾向が強くなる。そして治療は部品の修理であり、この部品(臓器)は場合によっては取り替えも可能な物として対処されるのは周知のとおりである。

### 5.2 要素の選抜と捨象

前に確認したとおり、デカルトは考察対象をより単純な部分に分割し、各部分をそれぞれ思惟した後に全ての部分が思惟されたか否か全てを数え上げて点検すると述べている。

しかし科学的方法で理論構築が試みられるとき、分解された全ての要素間の因果関係を確認することは極めて困難で、しばしば不可能である。そのため実際には、一部の要素のみを選抜して他は捨象し、選抜された要素間の因果関係

のみを確認して理論化を図る。その際、対象をどこまで詳細に分析できるか、分析された諸要素間の因果関係をどこまで特定しうるかということが理論の有効性を左右する。これらの技術が低ければ多くの要素を捨象するか、あるいは一定の条件内に固定するという仮定をしなければならぬ。たとえば経済学で見られる「経済人」という仮定などは冷静に考えてみれば極めて非現実的な仮定ではなからうか。

分析や要素間の因果関係を確認する技術が向上すればより多くの要素を選抜することが可能となり、構築される理論もより有効性の高いものになる。たとえば経済学においても「制度」と翻訳されている諸要素を取り込んだとき、論理的には理論は一步向上したと行うことができる。

しかし科学的方法に依拠した研究といえども、理論構築はそれほど純粹培養的な営みだけではなさそうだというのが本研究のそもそもの問題意識である。分析においてもデータの統計処理結果の評価においても、そこに宗教的価値観や政治的要因が介入している可能性は低くない。もしそうだとすればこの介入がある時理論の客観性は歪められる危険性が高まる。科学的方法の根底に存在するであろう文明史的諸要因はこれだけではない。人種的・民族的序列意識や優性意識が介在している可能性もある。したがって研究に携わる者は、特に外国の学説や諸制度を輸入し評価する場合にはこれらの諸要因への配慮をしておくことも重要な責任とならう。もし仮にこのような要因解明への配慮もなく、ナイーブに憧れや尊崇の念で取り組めば、これらの諸要因が見えなくなることは言うまでもない。

## 6. 本研究の総括

本研究で確認したことを簡潔にまとめてみよう。より根底的なものからより具体的なものへという順序でまとめれば下記のようなようにならう。

### 1) ヨーロッパに伝統的に継承される実体論的思考の存在

実体論的思考とは、この世界に存在するものの根底には存在を支え規定する実体があり、従って存在はこの実体でもって説明することができるという思考である。ヨーロッパには実体論的思考が古代ギリシャの時代から存在する。

ただ、この実体、言い換えれば存在原理がプラトン以降、超自然的な実体となっている点がヨーロッパ的思考の特徴である。

2) いまひとつ、ヨーロッパにおける学問を性格づける要因としてキリスト教が大きな影響を及ぼしていることは重要な点である。これらの点は日本にはなじみの薄いものであるだけに特に注意をして読み解く必要がある。

### 3) 科学的方法の視角からとらえたデカルトの思想の論理

①デカルトにも超自然的原理による実体論的思考形式は継承されている。彼は人間を説明する根拠・実体を「精神」とする。精神は別の言葉で言えば理性であり、理性のはたらきが思惟（コギト）である。そして思惟するものは存在する。ここにはスコラ思想からの脱却を試みる意図が窺われる。人間が自ら思考し真理を探究することの重要性と、その確かさへの自信が明確に読みとれる。

②精神を抽出するための論理が二元論で、この論理を適用した結果、精神をもたない存在が「物」として措定される。そして「物」を新たな概念で捉える。これが「機械論的自然観」である。これは人間をも含む全ての被造物（creature）を自然（nature）とし、そこには生命や目的があるとしていたそれまでの自然観からの革命的転換であると考えられる。ちなみに精神を分離した人間の「身体」も物とされる。

③物を説明する実体を捉えるために、これを細かい部分に分割する。要素還元である。要素（部分）の特性を捉えたら、これらを因果論的

に総合して全体が説明される。このように具体的方法の面では、今日の科学の基本的思考形式の原型がすでに明示されているとも言えよう。機械論的思考、因果律思考、要素還元思考などである。

#### ④神への依存、キリスト教の影響

a) 精神の由来は神に求められている。精神を神による人間への注入とする点で明らかにキリスト教の教えを継承しているとも言えよう。

b) 物の法則を捉えるときにも、そこには神による Design が有ることが大前提とされている。コペルニクス、ガリレイ、ニュートンなどによる自然観察と記録がこの神の Design を確かめるといふ動機でなされたことは周知のとおりである。

#### おわりに

人類の長い歴史における学問的営みの発達を見ても、科学的方法は最も客観性を高めることができる方法だと言えよう。しかしそれが人間の営みである以上、そこから主観性や偏見を完全に排除することはできない。

経営学分野に限定して言うが、欧米、特に米国の学説や経営制度にも、ここに指摘したような、日本にはほとんど無い要因が関与していることを忘れてはなるまい。今すぐにできると思われる方策を若干提案して筆を置きたい。

①欧米の学説もグローバルな視野で見ると、ローカルで特殊な地域で作られたものにすぎない。したがってそれらに普遍的有効性があると思ひ込まないことが肝要である。

②欧米の学説や諸制度を、根拠なく尊崇しないことも重要である。尊崇と偏見はいずれも客観的観察や評価を歪めるからである。本研究で確認したような潜在的思考傾向の存在を認識し、何が有効で何が有効でないかを冷静に見極めることが肝要であろう。

③自国の制度や技術を軽率に過小評価しない

ことも重要である。「ガラパゴス化」という語を自嘲気味に使うのも冷静さを欠いた行動だと言わざるを得まい。少なくとも研究者と実務家はこのような卑屈な行動は控えるべきではあるまいか。

#### 注

- 1) 拙著『持続的成長のためのコーポレート・ガバナンス：株式会社設計思想からの考察』広島経済大学出版会、平成27年9月参照。
- 2) 山本貴裕「科学と宗教の再融合：キリスト教の学問の可能性」『広島経済大学研究双書』第18冊、2000年6月参照。
- 3) 日本社会で生活しているとなかなか理解しにくいことかもしれないが、米国民の日常生活がキリスト教の神の信仰と強く結びついている事例は多くある。たとえば大統領の就任式において、宣誓は聖書に手を置いて行われるし、硬貨には「IN GOD WE TRUST」と刻印されている。紙幣は federal reserve note であるが、これにも「IN GOD WE TRUST」と印刷されている。
- 4) 筆者の研究分野の事例ではないが、日本のマスコミの報道姿勢にも類似の傾向が近年目立つように思われる。たとえばスポーツ分野の報道において、結果の内容に基づく報道が行われるのではなく、逆に結果の如何にかかわらず特定の人物の報道が常に優先される事例をしばしば見せられる。これはマスコミが予め自分たちの伝えたい物語を作っておき、これの報道を優先するからであろう。マスコミの社会的使命をないがしろにする行動と言わざるを得まい。
- 5) 拙稿『研究の科学性を高める要件—科学の思考法と研究方法を中心として—』広島経済大学経済研究論集、第37巻2号、2014年9月参照。
- 6) 広重 徹『科学と歴史』（改訂第3版）、みすず書房、1980年、271頁。
- 7) 井山弘幸、金森 修「現代科学論：科学をとらえ直そう」新曜社、2006年、26頁。
- 8) 木田 元『反哲学入門』新潮社、平成24年6月、J. H. ブルック著、田中靖夫訳『科学と宗教』工作社、2005年12月などを参照した。
- 9) スティーヴン・ワインバーグ著、赤根洋子訳『科学の発見』文芸春秋、2016年7月、197頁。
- 10) J. H. ブルック著、田中靖夫訳、前掲書、1～2章。
- 11) スティーヴン・ワインバーグ著、赤根洋子訳、前掲書、325～326頁。
- 12) J. H. ブルック著、田中靖夫訳、前掲書、14、27頁。
- 13) F. ベーコンやJ. ロックがその代表的思想家である。
- 14) R. デカルト著、落合太郎訳『方法序説』岩波書店、昭和42年を用いる。

この書は1637年、デカルトが41歳の時に出版されたものである。これは真理を求めるとの方法について論じたもので、デカルトが試みた学問革新の根本的性格を述べたものでもある。その内容は理性によって学問をその本来の姿へ連れ戻す「方法」を解説したものとされている。

- 15) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 197頁。
- 16) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 197頁。
- 17) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 45-46頁。
- 18) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書。

精神は人間固有のものであって、動物といえどもこれは有していない。したがってこの論理に従えば猿も犬も物である。ちなみに、今日では「動物心理学」という学問分野も作られているが、動物に「心」があるか否かはキリスト教社会では長い間重大な問題であったようだ。

- 19) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 12頁。  
ここで翻訳語としての「理性」について少々言及しておこう。デカルトが生きていた時代の「raison」が「理性」と翻訳されると、日本人の多くは今日われわれが認識している、神とは無関係の理性の意味でデカルトの主張を解釈しがちになる。しかしこれではデカルトの思想を正確に理解することはできないのではなかろうか。詳細な比較は省略するが、両者の根本的な違いを言うなら、前者はキリスト教の神に由来する能力であるが、わ

れわれが日常使う「理性」はキリスト教徒でない者にとっては神とは無関係な能力だからである。ちなみに、このような意味のズレはこの語に限らず翻訳に常に付きまとう問題である。

- 20) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 4頁。
- 21) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 189, 196頁。
- 22) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 第4部, 48, 52, 208頁参照。  
デカルトは言う。このような観念はあらゆる完全性を備えたもの、すなわち神の本性によって私(デカルト)の内に注入されたのであるとしか考えられない。私どもの内なる全てのものは神から来る。神に由来するから、真実ならざるを得ない神は常に信頼できる。ゆえに私どもの明晰・判明な観念は真である。私どもの観念が真である限り神はその作り手である。
- 23) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 221-222頁。
- 24) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 202頁。
- 25) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 148-151頁。
- 26) R. デカルト著, 落合太郎訳, 前掲書, 145-148頁。
- 27) 『哲学事典』平凡社, 1982年7月, 606頁。
- 28) 前掲『哲学事典』848, 1202頁。